平林久枝編

強制連行と従軍慰安婦

強制連行と従軍慰安婦

平林久枝編

2916

「強制連行と従軍慰安婦」平林久枝編
日本図書センター

はっきりさせなければならない」と語っている。

35　原告　金学順（キム・ハクスン。軍隊慰安婦）

原告金学順（以下、「金学順」という。）は、一九二三年中国東北地方の吉林省で生まれたが、同人誕生後、父がまもなく死亡したため、母と共に親戚のいる平壌へ戻り、普通学校にも四年生まで通った。母は家政婦などをしていたが、家が貧乏なため、金学順も普通学校を辞め、子守りや手伝いなどをしていた。金泰元という人の養女となり、一四歳からキーセン学校に三年間通ったが、一九三九年、一七歳（数え）の春、「そこへ行けば金儲けができる」と説得され、金学順の同僚で一歳年上の女性（エミ子といった）と共に養父に連れられて中国へ渡った。トラックに乗って平壌駅に行き、そこから軍人しか乗っていない軍用列車に三日間乗せられた。何度も乗り換えたが、安東と北京を通ったこと、到着したところが、「北支」「カッカ県」「鉄壁鎮」であるとしかわからなかった。「鉄壁鎮」へは夜着いた。小さな部落だった。養父とはそこで別れた。金学順らは中国人の家に将校に案内され、部屋に入れられ鍵を掛けられた。そのとき初めて「しまった」と思った。翌日の朝、馬の嘶きが聞こえた。隣の部屋にも三人の朝鮮人女性がいた。話をすると、「何とバカなことをしたか」といわれ、何とか逃げなければと思ったが、まわりは軍人で一杯のようだった。その日の朝のうちに将校が来た。一緒に来たエミ子と別にされ、「心配するな、いうとおりにせよ」といわれ、そ

して、「服を脱げ」と命令された。暴力を振るわれ従うしかなかったが、思い出すのがとても辛い。

翌日から毎日軍人、少ないときで一〇人、多いときは三〇人くらいの相手をさせられた。朝の八時から三〇分おきに兵隊がきた。サックは自分でもってきた。夜は将校の相手をさせられた。兵隊は酒を朝から飲み、歌をうたう者もいた。「討伐」のため出陣する前日の兵隊は興奮しており、特に乱暴だった。朝鮮人とののしられ、殴られたりしたこともあった。これらの軍人たちは犬と同じで、とても人間とは思えなかった。部屋の中では、中国人の残した中国服や日本軍の古着の軍服を着せられた。週ないし月に一回位、軍医がきて検診を受けた。同原告は肺病にかかったため、薬をいろいろもらった。六〇六号という抗生物質の注射も打たれた。

金学順はそこでは、「アイ子」という名前をつけられた。他の四人の朝鮮人女性は、一緒に来た「エミ子」の他、最も年長の「シズエ」（二二歳）と「ミヤ子」（一九歳）「サダ子」（同）という名前だった。シズエは、別室で特に将校用として一室をあてがわれたが、他の四人は一部屋をアンペラのカーテンで四つに区切ったところに入っていた。食事は、軍から米・味噌などをもらって五人で自炊した。

この鉄壁鎮にいた日本軍部隊は約三〇〇人位の中隊規模で、「北支」を転戦していた。鉄壁鎮には一ヵ月半位いたが、何度か移動した。金学順ら女性たちも一緒に移動させられた。行く先々の中国人の村には、中国人が一人もいなかった。いつも空屋となった中国人の家を慰安所と定められた。

ある日、兵隊が二人の中国人を連れてきて、みんなの前で目隠しをして後手に縛り、日本刀で首を切り落とすところを見せた。密偵だと言っていたが、おまえたちも言うことをきかないとこうなるとの見せしめだった。

金学順は毎日の辛さのため逃げようと思ったが、いつも周りに日本軍の兵隊があり、民間人と接触することも少なく、中国での地理もわからず、もちろん言葉も出来ないため、逃亡することはできなかった。ところが、その年の秋になったある夜、兵隊が戦争に行って少ないとき、一人の朝鮮人男性が部屋に忍び込んできて、自分も朝鮮人だというので、逃がしてほしいと頼み、夜中にそうっと脱出することができた。その朝鮮人男性は趙元瓚と言い、銀銭の売買を仕事としていた。金学順はこの趙について南京、蘇州そして上海へ逃げた。上海で二人は夫婦となり、フランス租界の中で中国人相手の質屋をしながら身を隠し、解放のときまで生活をした。一九四二年には娘、四五年には息子が生まれた。四六年夏になり、中国から同胞の光復軍と最後の船で韓国に帰った。

しかし仁川の避難民収容所で娘が死に、一九五三年の朝鮮動乱の中で夫も死に、金学順は行商をしながら息子を育てていたが、その息子も国民学校四年生のとき、水死した。唯一の希望がなくなり一緒に死にたいと思ったが死にきれず、韓国中を転々としながら酒・タバコものむような生活を送ったが、一〇年前頃から、これではいけないと思いソウルで家政婦をしてきたが、今は年老いたので、政府から生活保護を受けてやっと生活をしている状態である。

身寄りがない金学順にとって、人生の不幸は、軍隊慰安婦を強いられたことから始まった。金をいくらくれても取り返しのつくことではない。日本政府は悪いことを悪いと認め、謝るべきである。そして事実を明らかにし、韓国と日本の若者にも伝え、二度と繰り返さないことを望みたい。

〔二、原告らの経歴　第二次原告団〕

1　原告　李貴粉

原告李貴粉（イ・キブン。以下、「李貴粉」という。）は、一九二七年（戸籍上は一九二九年）、慶尚北道永川に生まれた。李貴粉は、四人きょうだいの長女であり、永川中部小学校四年まで通学していた。学校では日本語を教え、韓国語は習わなかった。満一一歳ころ、一家がウルサンに引っ越し、さらに釜山に引っ越そうとしている時、一九三八年の一〇月頃の朝一〇時くらいのこと、李貴粉が、ウルサンの村で、女の子三人で、「かあちゃん、この子をどうするか、すてておいててかわいそう……」こうした歌を歌いながら、縄跳びをして遊んでいた時、日本人と朝鮮人通訳の二人連れの男たちに声をかけられた。その男たちは、「お父さんが呼んでいる、一緒に行こう」といって、李貴粉を連れ出した。このとき李貴粉は、黒いチマ、白いチョゴリの普通の格好をしていたが、体格もよく一四歳くらいに見えたのではないかと思う。その男たちは、李貴粉をウルサン市内の下宿専用の「チョンミョンギル」（趙明吉か）の家に連れ込んだ。李貴粉は、途中でおかしいと思い、「家に帰

方を問いなおそうとすると、終戦への感慨がひときわ強烈です。それは「昭和」の検証でもあります。

私にとって敗戦は単なる一事件ではなくて、軍国主義教育の中でいびつに歪められながらも、精一杯生きていた生活の一切、生きる指針、信念を根底から打ちこわされた時なのです。やがて戦争放棄と再軍備しないことを明記した新憲法のスタートを喜び、平和な国家こそ日本の進路なりと、ようやくわが鈍なる頭の切り替えができたころ、日本は早くも再軍備をはじめていました。

しかし、その後起った戦争をみれば、戦争によって解決できた問題は何ひとつありません。朝鮮戦争、ベトナム戦争、湾岸戦争など、どの戦争をみても途方もない環境破壊と民衆の犠牲、家族の離散などの悲劇が累々と残され、そして戦争をおこす前以上に相互には大きな不信感がつくろい難く巨大な口を開けています。

この恐ろしい戦争を人類は何百回くり返したら気がすむのだろうか。民衆にほんとうに単に戦争の犠牲になるだけの存在なのでしょうか。そうではないと思います。

一握りの軍需資本やそれに支えられた支配層だけに責任をおしつけて犠牲者づらだけをしている限り、私たちは戦争から解放されません。

子ども時代の戦争のとき、私たちは戦争する大人たちに激励の慰問文を書いたし、すこし年上の兄や姉たちは軍需工場で働いたり、兵隊に志願しました。これらは戦争協力です。大人たちはいうまでもありません。

そうしなければ殺されたかも知れないというのですか。それでも自分が殺すことはなかったのです。顔をみたこともない外国の人を。

いちばん大切なことは武器をつくらないこと、平和の教育をすすめることです。過去の戦争でどんな狂気が、悪魔の罪業が大手をふっていたか、徹底的に子どもたちに教え、わが肝にも銘じて日常化しなければ、平和は守れないでしょう。

「戦争と平和」市民の記録⑬
強制連行と従軍慰安婦
発行／一九九二年五月二五日　初版第一刷
定価／二、五七五円（税込）
編　者／平林久枝
解説者／平林久枝
発行人／高野義夫
発行所／日本図書センター
112 東京都文京区大塚一三一四一一三
電話・〇三一三九四七一九三八七
編集・制作／皓星社
印刷・製本／第二整版印刷

ISBN4-8205-7109-5　C0395　P2575E